

## 2020年度 社会学部優秀論文賞（安田賞）講評

選考委員会コンピナー 今井信雄

2020年度は新型コロナウイルスによる教育環境の激変を経験し、卒業論文の作成においても多大な困難が生じました。安田賞候補となる優秀な論文をどれだけ推薦していただけるか不安も生じましたが、幸いなことに8編の卒業論文を推薦していただき、今年度も安田賞受賞対象論文を選考することができました。8篇はいずれも、新型コロナウイルスによってもたらされた研究環境の大きな制限がありながら、さまざまなテーマにチャレンジし、学生・教員の努力の跡がみられる内容となっていました。

2月24日に選考委員会が開かれ、6名の選考委員による査読の評価を元に慎重に審議がなされました。そこで、推薦された8編のうち2編が非常に優れており、安田賞としてふさわしいと委員会は判断しました。そして、その2篇についての評価の検討を行った結果、両論文は甲乙付けがたく優れており、いずれも最優秀論文としてふさわしいとの結論に至りました。

ひとつめの論文は、橘航大さん（社会心理学・清水ゼミ）の「自尊心の潜在的指標についての妥当性の検討－顕在指標の系統誤差の除去と収束的証拠の観点から－」です。この論文は、社会心理学における「自尊心尺度」の妥当性を問題としています。橘さんは、本論文で、自尊心を測定するための尺度として用いられている「顕在的自尊心指標」と「潜在的自尊心指標」の相関は、他の顕在指標と潜在指標の相関に比してなぜ低いのか、という点について、社会心理学および心理統計学の観点を併用して検討しています。本論文では、関西学院大学の学生を対象に実験を行っただけでなく、日本のクラウドソーシングサービス企業に登録しているモニターおよびアメリカのクラウドソーシングサービス企業に登録しているモニターを対象に実験を行い、日米の比較を行うデータの取得および分析に際して非常に多くの努力が費やされたものと評価できます。さらに、最新の数理モデルを用いた測定手法によって系統誤差を取り除き、潜在的指標の妥当性を緻密に検討した結果、日本・アメリカの双方において、潜在的自尊心指標には一貫して収束的証拠が見られない、つまり相関が低い原因は本研究で扱った系統誤差ではないことが結論づけられました。査読委員から、本論文は修士論文ないし投稿論文のレベルに達しており卒業論文としては群を抜いた完成度の高さと評価され、最優秀論文としてふさわしいと委員会は判断しました。

ふたつめの論文は、重本佳音さん（データ社会学・長松ゼミ）の「小学生への震災教育の実態－福島県郡山市を事例として－」です。本論文では、東日本大震災被災地である福島県郡山市で、現在どのように震災に関する教育がなされているのかという問題を扱っています。郡山市の小学校に勤務する教員を対象にした調査票調査、教育機関の管理職経験者へのインタビュー調査、さらに郡山市の小学校に在学する児童を対象にした調査票調査が行われ、当地域における震災教育の量的質的データを網羅的に収集することに成功しています。この重本さんの調査によって、おもに3つのことが明らかになりました。第一に、当地域で小学校が行っている震災教育は「放射線」に関する内容が中心であること。第二に、震災教育の内容は教員に委ねられ総合学習の時間以外に理科や社会など教科教育のなかでも行われていること。第三に、教員は、震災という出来事そのものより、それを踏まえて何を伝えるかを考え震災教育を行っていることです。震災教育の実態を、広範囲に捉え丁寧に調査分析を行い、全体像を明らかにすることができたという点で、本論文はスケールの大きな調査研究として高く評価されます。重本さんの調査で得られたデータは震災教育に関する貴重な資料として大きな意義があり、最優秀論文としてふさわしいと委員会は判断しました。

両論文に共通して評価されるべきは、問題を明らかにするための多大な努力です。ひとつの調査や実験

により得られた結果に満足せず、残された課題を解決するため、さらなる調査や実験を重ねていくその姿勢は、自身が設定した研究の問いを突き詰めようとする学問的態度であり、まさに学生の範と言えるものです。

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大状況により、学生も教員も非常に困難な状況に置かれました。そのなかでも、このような優れた卒業論文を作成することができたことに対し敬意を表します。

(なお、橘航大さんの論文については、他の学術雑誌に掲載が予定されており、今号に掲載されておりません。)

## 最優秀論文賞

| 氏名    | 指導教員  | 専攻分野   | 卒業論文題目  |
|-------|-------|--------|---|
| 橋 航大  | 清水 裕士 | 社会心理学  | 自尊心の潜在的指標についての妥当性の検討<br>- 顕在指標の系統誤差の除去と収束的証拠の観点から - |
| 重本 佳音 | 長松奈美江 | データ社会学 | 小学生への震災教育の実態<br>- 福島県郡山市を事例として -                    |

以上 受賞論文 2篇 2名

## 上記以外の推薦論文

| 氏名    | 指導教員  | 専攻分野     | 卒業論文題目  |
|-------|-------|----------|---|
| 高尾 祥平 | 村田 泰子 | 現代社会学    | ラグビーというスポーツはなぜセクシュアリティの壁を越えることができないのか<br>- 中学ラグビー部元チームメイトへのインタビュー調査を中心に - |
| 木村 美月 | 立石 裕二 | 現代社会学    | ツイッターの美容アカウントが消費者の購買意欲を高めるのはなぜか   |
| 福田 莉子 | 今井 信雄 | フィールド社会学 | 持続する地域社会に向けて<br>- 大阪市福島区「売れても『占い』商店街」を事例にして -                             |
| 森口さくら | 石田 淳  | データ社会学   | 母子世帯と子どもの貧困   |
| 落合 望  | 鈴木 謙介 | 現代社会学    | 「しいたけ占い」はなぜ若者の心を掴むのか？<br>優しいスピリチュアルが生み出す自己啓発                              |
| 井上 凌侑 | 佐藤 哲彦 | フィールド社会学 | 「慢性の痛み」と患者の語り<br>- 相手に理解されない困難さをどのように対処するのか -                             |

以上